

復活節第2主日  
(神のいつくしみの主日)

第一朗読 使徒言行録 4・32-35  
第二朗読 一ヨハネ 5・1-6  
福音朗読 ヨハネ 20・19-31

2024.4.7 9:30 ミサ  
カトリック高円寺教会  
主任司祭 高木健次神父

もうだいぶ前ですけども、ラジオを聞いていましたらば、お葉書でこういうのがありまして、バスの中で子どもが騒いで、そうしたらお母さんが「運転手さんに怒られるわよ」って——今は教育上そういう言い方が効果的ではない、良くないってというのがだいぶ広がっているんで、そういうことを言う人はあんまりいないんでしょうけども、昔はよくあったと思いますけども——お母さんが「運転手さんに怒られるわよ」、こう言ってた。そうしたら車内放送で運転手さんが「運転手さんは怒りませんよ」って(笑)、こう言って、社内がほっこりしたような雰囲気になったっていうことがありまして、運転手さんも勝手に自分のことを決め付けられるのがもう何回もあって、思わず言ってしまったんでしょかね。

わたしでも、もしこのお御堂で子どもが騒いで、お母さんが「神父様に怒られるわよ」って、そういうふうに鎮めようとしてたらば、まさかミサ中に放送では言わないと思いますけれど、「いや、そうではないんだけどなあ」って思います。むしろ、周りの人がもっと思い遣りのある雰囲気と言いましょか——子どもたちも成長すれば、怒られるからということではなくて、周りの人のために静かにすること学んでいく、そのときを待つようにしたいと思うわけですけども、今日、なんでこんな話から始まるかというと、今日の復活節第2主日は「神のいつくしみの主日」っていうことになっております。

これは、2000年に時の教皇、ヨハネ・パウロ二世教皇によって制定されたわけですが、そもそもは20世紀の初頭、ポーランドのシスターにイエス様のお告げがあって、そしてそのシスターがイエス様からいただいた言葉を日記にずうっと付けていた。そのことを通して、神のいつくしみへの信心が、ポーランドを中心に徐々に——シスターの死後です、シスターは33歳という若さで亡くなりましたから——広がりました。このシスター聖ファウスチーナは2000年に列聖されました。ちなみにですけど、この聖ファウスチーナの聖遺物は東京のカテドラルにも安置されております。ですので、もしいらっしゃったら、右の方のところにフランシスコ・ザビエルと、それから聖ヨハネ・パウロ二世教皇と、ケルンからもらった三人の博士と一緒に、その聖遺物が安置されていますのでお参りになったらいいと思います。

イエス様のお告げを通して、そして復活節の第2主日、復活の聖なる八日間を祝うその締めの日、神のいつくしみを特に思い起こす主日としなさいというお告げがあったとされています。それは、イエス様の十字架の死とそして復活そのものは、神様の愛、いつくしみを表わすためのものだから。神様がお造りになったわたしたち一人ひとりを愛しておられる、わたしたちがその愛を受け取って、自分自身を大切なものと感じ、またお互い同士——第二朗読にもありましたけども——大切にしよう、それを神様は望んでいる。それを決定的に表すために十字架の死さえも受け入れられ、そして神の愛は全てを超えることを表わすために、イエス様が復活された。そのイエスの死と復活の意味、目的を復活節第2主日にもう一回確認するようにと、こういうことです。

しかし、それは、20世紀になってイエス様がわざわざ告げなくても、実は聖書にもちゃんと書いてあるし、それを通してキリスト者の共同体が始まったわけです。弟子たちも神様、イエス様の愛に動かされて、新しい生き方、そして新しい共同体が出発した。最初のキリスト者の体験だし、聖書にも書いてある。しかし、イエス様は歴史の中で時々ご自分でご出現と言うか、誰かにそのことをお示しになるわけです。古くは17世紀のフランスのイエスのみこころへの信心ですね。聖マリア・アラコック、やっぱりシスターにイエス様がお出現になって、そして、愛のために燃えそして傷ついているご自分の心をお示しになった。有名ですね。

そういうふうに時々、イエス様が、20世紀にはファウスチーナを通して、またその他にもいろいろな形で、と同時にマリア様も含めて、すでに聖書で言われていることをご自分の直接のご出現、ヴィジョンやお告げを通して示し続けるということは、神様のあわれみはほんとに汲み尽くすことができない、絶えずわたしたちが思い起こし、そして新たにいただかなければならないって、そういう信仰の中心であるからとも言えますけれども、一方で、信仰がともすると神様の愛、今日の言い方と言うならば「いつくしみ」を中心にしたものではない、別の強調点の方に逸れて行っちゃう。神様が、あるいはイエス様がいつも罪に対して怒り、すぐ地獄に落としてくるような、そういう「イエス様に怒られるから」というふうになってしまうので、「いえ、イエス様は怒りませんよ」ということを絶えず告げたいと思われているのではないのかなと感じます。

今日の復活節第2主日を神のいつくしみの主日と制定すること、また、それだけではありません、そのいつくしみを中心にした信心業を呼び掛けていらっしゃるわけです。もちろん、罪人のためにいつくしみを祈るし、そして神のいつくしみを願うわたしたち自身が互いにいつくしみを表わし合うように招かれます。イエス様はそのファウスチーナに三つの次元でのいつくしみの示し方を確認されています。聞いたら当たり前と思うかもしれませんが、第一は行動、第二は言葉、第三は祈りであるっていうふうに日記には出てるそうです。

わたしたちが絶えずイエス様あるいは神様に対する恐れではなくて、愛されてるっていうことから出発しながら、その愛をわたしたちが受け取ることで変えられていくように、私たちを招き、待っていらっしゃるんだっていうイエス様のみこころを、誤解することなく、人間の中で神様の神秘を完全に理解することはできないとしても、でもゆがめて大きく逸れて行くことがないように、歴史の中で絶えず導かれるイエス様のそういう思いを、わたしたちもこの主日を通して改めて思い起こしたいと思います。

イエス様は、気前良くすることは自分には簡単、でも、恵みをわずかしか与えないことのほうがむしろ難しいんだっておっしゃいます。限りないいつくしみを求めるように。神様の、イエス様の愛の泉からその愛を、いつくしみを汲む唯一の器はイエス様への信頼だと言えます。わたしたちがこの主日に、それぞれイエス様の思いを新たにいただき直す、そのいつくしみを求め、そしてわたしたち自身もイエス様のようにいつくしみ深い者に変えられていく。そのためにだったらいくらでも恵みがある。その信頼を新たにしながら、このごミサを通して神のいつくしみを願いたいと思います。

---

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>